

大学は従来の学部方式と異り、教育を受けもつ学群と、研究の場である学系とに別れ、教官は学系から学群に派遣されて講義をする形式のため、生徒との間が粗であるという。又、その名称もわかりにくく、学生に聞いてもよくわからぬという心細さである。かつて教育大を見なれた目には、筑波大の学生は総じてお金持のお坊ちゃん風に見える。時代がそうなったのかもしれないが……

公開講座は他大学に比べると多いが、お遊び的な物がほとんどなのがとても残念である。大学会館では映画会、音楽会などの催し物をよくするが、研究交流センターはもつと地域住民にも社会教育の場を提供すべきと思う。宝のもちぐされでは惜しい。

その他図書館、病院、駐車場などについての問題もあるが、新しき町は周辺の心暖き人々に恵まれ、住み心地は決して悪いものではないと思う。

(15回生)

弁 理 士 試 験 の こ と

島 田 文 子

弁理士とは工業所有権（特許、意匠、商標等）の事項に関し、出願人や権利者の代理を務める職業です。

私の就職先である企業は工業所有権と深い関わりを持っており、配属先がその特許部であったことが受験への足掛りでした。企業における、特に事務系の女性の立場は、企業側の役割期待に限度がある以上、余程のことがない限り、女性を教育し、その限度を越えたものを求めてこないというのが現状であり、その意味で逆説的な厳しさがあります。

受験の動機は大変曖昧な表現ですが、上で申しあげた限度を越えたいという気持と、努力せずして得られるものは、そのためのパスポートとしては価値がない故、努力を伴う何かに挑戦したいという気持でした。会社と全く別の何かでなく弁理士を選んだのはやはり安全圏に魅かれての勇気の無さを示すものでしょう。

弁理士試験は第一次が多枝選択式、第二次が論文、第三次が口述試験で、工業所有権四法と条約の必須科目の外に法律及び技術系の中から三科目を選択します。専門とはほぼ無関係な科目ばかりの故、私はアンバランスにも憲法、刑法と土壤学を選択いたしました。

最初は夜間の受験講座に週二回通っており、そこでゼミナール参加への勧誘を受けました。後日聞く処によると、そのゼミは合格率も高く、初心者はとて入会できないが、女性は別とのことで、女性の特権？を行使して私はその一員になれました。お正月も合宿で過ごすというハードな内容でしたが、それは一年足らずで合格という成果となってあらわれました。短期間での合格ということは、やはり何かが欠けるものである故必ずしも好ましいとは言えませんが、会社生活の上に受験生活を積み上げての毎日はそれなりの歪みを避けられないもの故、結果的には良かったと言えましょう。

弁理士という職業は最近多くの国際条約も発効し、益々国際的な性格を強めています。また、デスクワークを主体としていることから、例えば弁護士等と比べても女性の職業としてより適している部分も多いと考えておりますが、現在女性弁理士の数は全国で30数名と余りに少ないことが非常に残念

です。ただ、資格とはあくまでパスポートに過ぎない故、弁理士をライフワークとして進めるか否かはやはりその女性がどれだけの努力を重ねるかに待たざるを得ません。私自身も女性はハンディキャップを避けられない故不公平だなどというひがみ根性をこの際一掃して頑張らざるを得ないと思っております。

最後にPRめいて恐縮ですが、弁理士仲間六名と傾倒して翻訳にあたっておりますLadas博士の“Patents, Trademarks, and Related Rights -- National and International Protection-”の第一巻が近々発行の予定でございますので何かの折にでもご一読願えれば幸甚でございます。

(21回生)

日経入社4年めに思う

佐竹淑子

私は日本経済新聞社に50年4月入社した。仕事はデータバンク局記者であり、あとにも先にもこの種の女性記者はいない。かつてNHKで「事件記者」という番組があったため、新聞記者は記者クラブにいて電話1本で飛び出していくというイメージが一般的であるが、巨大な新聞社の組織の中で働く記者は多種多様である。取材記者もいれば、内勤の記者も多い。私の部では、一度記事にしたものをコンピューターに入れ、それを組み直して新しい情報に加工、社会のニーズに合わせて出していく仕事をしている。50年3月にできたばかりの局で、しかも日本初の全く新しい情報産業であるため、試行錯誤の面が多く、毎日が多忙を極め、この4年間があつという間に過ぎたと言っても過言ではない。

日経では大卒の男女の差が仕事でも給料でも全くない。その点が他の企業と違い、却って私は男女における社会性の違い、女性の社会への進出の難しさなどを身をもって体験することになった。

この世界は「プロ意識」をしっかり持たないとやっていけない面があまりにも多い。時間や手間を惜しんでは決していい仕事はできないからである。だから時間は全く不規則になるし、仕事優先のため、私事は自由がきかなくなることも覚悟しなければならない。私など朝は10時に出社するが退社をするのは夜の10時、11時になるのはざらである。会議も夜7時ごろから11時ごろまでやるのが普通である。家で食事をしない日が何日もあり、日曜日はただひたすら寝るだけの日が続く。とにかく一生懸命仕事をする姿勢が何より要求される世界である。忍耐と体力が必要であるが、女性であつてここまでやれる環境を得られたのは幸いであつた。

今、一番悔んでいるのは大学時代の勉強不足である。周囲の男性軍は私などよりはるかによく勉強していた。知識の面でも、考え方でも、私はスタート時点から彼らにかなり水をあけられ、差を縮めるところか、これ以上離されないように、あらゆる事柄に関心を払うよう努力することで勢一杯であつた。4年間の貴重な大学時代、何故にもっと巾広く勉強していなかったのか、何故にもっと真摯な態度で物事を見なかったのか。恐らく「女だから」という甘えに浸りきっていたためだろう。そんな私が「女だから」では通用しない世界に足を踏み込んでしまったのは皮肉な話である。